

19. 和楽器 箏の指導法

音楽教育講座 小島 律子

ritsuko@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

1 新しい小学校・中学校の学習指導要領

音楽科では、学校で教えるべき音楽文化として、これまでのような西洋音楽ばかりでなく、日本伝統音楽を取り上げようという動きが高まっている。とくに教育基本法の改正により、日本伝統文化の継承と創造が本文に盛り込まれたことから、平成20年度改訂の学習指導要領においても、小・中・高等学校通して日本伝統音楽の学習指導が前面に出るようになった。それは鑑賞するだけでなく、実際に児童・生徒が和楽器を演奏することも含んでいる。

平成20年の学習指導要領（小学校、中学校、高等学校）改訂の趣旨として、国際社会に生きる日本人としての自覚の育成、および他国の音楽文化を尊重する態度の育成から、「我が国や郷土の伝統音楽に対する指導が一層充実して行われるようにする。」と述べられている。

とくに中学校ではこの前の平成10年の改訂から和楽器演奏が必修となっており、この10年間で箏（ソウ）の授業があちこちで見受けられるようになってきている。それを受け、小学校でも今回の改訂では、教材にもわらべうたや民謡が挙げられ、楽器についても「和楽器」という用語が入った。

このような学校教育での伝統音楽重視の動きにもかかわらず。指導する教員は西洋音楽で育っていることから、和楽器の指導には二の足を踏む教員が少なくない。しかし和楽器は私たちの生活する風土や文化において育まれてきたものであり、日本語を母語とする子どもたちにとって馴染みやすいものである。まずは教師側の偏見や苦手意識を取り払うことが第一の課題である。

中学校での和楽器として最も普及しているのが箏である。そこで、中学校での箏につながるものとして、小学校での箏の指導法を考案したいと考えた。小学校音楽専科の教師であっても箏には触ったことすらないと察せられる。だれでも取り組めるような、丁寧なプログラムがあれば、小学校でも器楽の授業として箏の授業が可能になると考えた。

2 目的と方法

本教材づくりの目的は、これまで西洋音楽で育ってきた小学校現職教員に、音楽科の授業として箏を指導する場合の指導法を提示することである。

方法においては、附属校との連携、および院生との協働を図った。本学音楽教育講座では10年以上前から箏の授業科目を設置し、学部生から院生まで発展的に履修してきている。院生の協力を得ながら、大阪教育大学附属平野小学校の児童（1～3学年）に箏の指導を行い、その様子をビデオで撮影し、だれでもできる指導法を段階的に示したデジタル教材を開発す

ることにした。

3 教材開発の手順

具体的には、以下のように教材開発を進めた。

(1) 小学校1学年から3学年までの、箏による系統的な学習プログラムを作成する。

附属平野小学校教員、箏演奏家の本大学非常勤講師、及び教科教育の小島を中心に会合をもって、学習プログラムを作成する。

なお、箏を指導する場合、小学校1年生からはじめても6年生からはじめても、手順は基本的には同じであるため、小学校1年生で何ができるかという点から考えを進める。

(2) 作成したプログラムを実践、検証する。

プログラムを授業で実践し、修正を加えていく。授業のビデオ記録を撮り、子どもの取り組みの様子を記録しておく。院生が指導補助として授業実践に加わる。

(3) プログラムの実践ビデオ記録を中心にDVD映像を作成する。

映像には箏の扱いや奏法について、箏演奏家のモデル・デモンストレーションの映像を挿入し、院生がナレーションを考え、解説する。

4 本教材の内容と特徴

本教材の内容は大きく、A準備編、B実践編、C見本の曲の3編から成る。それぞれについて内容を述べる。

A 準備編 その1 箏の準備（調弦の仕方）

その2 箏の手ほどき（①座り方と姿勢、②箏を弾く場所、③弾く時の手の形、④弾く時の箏の爪の角度、⑤音の出し方）

B 実践編 さまざまな音色、テクスチャー（ピッチカート伴奏）、しっかり弾きの音色、音の高低（2音の音階）、3音の音階、テクスチャー（オスティナート伴奏）、テクスチャー（カノン）

C 見本の曲 箏演奏家による教材曲の見本演奏

つぎに、本教材の特徴は以下の点に認められる。

(1) 師匠からの個人指導で行われてきた箏の指導を、集団を基本とする学校教育で行えるよう、教材としての指導内容を明確にし、授業として構成している。

(2) 単に指導法を個人的な見解として提示するのではなく、学校教育音楽科における学力育成の考えに立って、実践検証を経たプログラムを作成している。

(3) 箏の手ほどき本はでているが、書籍では奏法の身体的な動きや実際の音響までは示すことができない。本教材ではデジタル映像として作成しているため、箏演奏での身体的な動きや実際に出る音色を伴ってモデルを提示することができる。

5 今後の課題

今回は小学校1年生の箏の手ほどきから3年生までの合奏プログラムを作成した。箏の指導は中学校へ続くものとして、学習内容の系統性を打ち出していくことが求められる。義務教育9年間の箏指導の見通しをもつことができるよう、小学校4年生から6年生、そして中学校1年生から2・3年生までのプログラムを作成していくことが今後の課題である。

